

1

ポケットがたくさんついているコートは便利だ。

大人用のコートはギルの身体には大き過ぎるが、裾が足首まであっても、袖から手が出なくても、それを補ってあり余る利点がある。長い袖をくるくると折り上げて、ギルは仲間の声に耳を傾けた。

「いいか。おれの掛け声で二手に分かれるんだ。そしたらとにかくダッシュしろ。絶対に立ち止まるなよ」

朝から晩まで一日中人通りが多いこの市場街だけれど、中でも一層行き来が激しくなるのがまさに今頃、太陽が頭の真上にいる時間帯だ。あちこちで屋台を広げる店主たちのセールストーク、値引き交渉を試みる買ひ物客の声、荷物がぶつかり合う音、靴

底が砂利を踏みしめる音——様々な音が混ざりあって作り出されるざわめきの中でも、馴染んだ仲間の声はギルの耳に確実に届く。

「うん」

「分かった」

ばらばらと返事がある。ギルも向かいから来た人の肩を避けながら、仲間たちと目を見合わせて頷く。

「よし、じゃあ行くぞ……ゴー！」

一斉に駆け出した子どもたちは大きく二手に分かれ、その後は思い思いの場所へ向かった。ある者はパンに、ある者は焼き菓子に飛びついていく。

そしてギルは、果物の屋台に近付いて荷箱の陰に隠れた。店主の動きに合わせて立ち位置を変え、店主以外の人間の視線からも逃げる。しゃがみ込んで息を殺し、じっとその時を待つ。

「ねえ聞いた？ 昨日の」

「ええもちろん。また発砲ですって、物騒ねえ」

「やっぱりロッドウエルの仕業なのかしら」

「きつとそうだわ。怖いわねえ」

最近世間を賑わしている暴力事件をネタに世間話をするご婦人たちの声が近付いてくる。そこへ店主が声をかけ、ご婦人たちが応える。

「奥さん、いいメロンが入ってるよ。十七番街で一番いいメロンだ！」

「まあ！ 主人が大好きなのよ」

そろそろだ。いつでも動けるように、わずかに腰を浮かす。店主が両手でメロンを持ち上げ、ご婦人たちに体を向ける。営業トークを始める。とろけるように甘いんだ、気をつけないとほっぺたを落っことしちまうぜ、今なら二つ買うと一割引きだよ——今だ！

店主の死角に陳列された果物を掴む。目についたオレンジやリンゴを次々とコートのポケットに放り込んでいく。

「あらっあの子！」

気付いたご婦人が声を上げた時には、既にギルのコートのポケットはいっぱいになっていた。

「おいこらこのクソガキ！」

店主に見つかり怒鳴られたらすぐ退散がルール。次のリンゴに伸ばしかけていた手を引っ込めて踵を返す。

「待て!!」

そんなことを言われたところで本当に待つ馬鹿はいない。追いかけてくる店主を無視して逃げる。空いた木箱を転がし立て掛けてあったモップを倒しごみ箱の中身をぶちまけ、店主の進行を妨害しながら建物の隙間に逃げ込む。

しかしギルの足は気持ちについてこなかった。爪先が石畳の凹凸に引っ掛かりバランスを崩してしまったのだ。両手について受け身をとったから怪我はしなかったが、代わりに店主に追い付かれてしまっ

た。

「覚悟しろよこのクソガキが」

店主の表情からも声からも、怒りが滲み出ている。

身の丈に合っていないコートは裾も袖もほつれ、

その下に着たシャツには穴があいている。ズボンの

ほつれは裾を折り返すことでごまかしているが、膝

の辺りが破れているのは隠せない。靴の底は薄くな

って剥がれているし、赤褐色の髪はぼさぼさ、顔も

泥だらけ。灰色の瞳には生氣がなく淀んでいる。外

見から身分を察した店主はギルのコートの襟を掴ん

だ。

「ふざけたことしてくれやがって、スラムのガキが

よお！」

拳がギルのみぞおちに入る。痩せた身体が宙を舞

う。果物が転がり落ち、いくつかはポケットの中で

潰れてしまった。せっかく美味しそうなものを選んで

盗ったのにもったいないなあ。痛みを脇に追いやり

ながら考える。

次は靴の先が頬に、続けて背中を蹴られる。真横

に飛ぶ。地面に落ちる。砂利が服を、肌を引っ掻く。

それでも何も言わないギルに、店主は苛立ちながら

吐き捨てた。

「聞いてんのかよ！」

頭を踏みつけられる。店主は更に何か言っている

が、地面と靴底で耳が塞がれよく聞こえない。聞こ

えたとしても、腹を殴られたせいか呼吸がづらい。

何か言おうとしても咳が出るばかりで言い返せな

っただろう。

「おいっ」

頭に乗った足に体重が掛けられる。締め付けられ

るような痛みが走る。さすがに顔をしかめたその時

だった。

「そのくらいにしたら？」

店主の行為を嗜める声に、ギルは目を動かした。